

< 小中学生のころ >

いい先生にめぐり合った下津井小学校

私の生まれた下津井は漁港であり、国立公園鷲羽山（わしうざん）があり、その後瀬戸大橋の起点となった岡山県の南端の町だ。

瀬戸大橋については「世紀の無駄使い」という人もあるが、私は昭和30年5月11日の宇野・高松を結ぶ国鉄連絡船「紫雲丸」沈没事件を忘れることができない。この事故で乗客781人の内168人が死亡したが修学旅行の小・中学生が多数いた。本州四国連絡橋は県民の悲願でもあった。

当時の小学校は今と違ってゆったりしたものだった。「先生行こう」と話がまとまればクラスはそろって鷲羽山へ半日遠足。また、教室の窓の外に囲みをつくって山から木や草花の苗をとってきて花壇作りがはじまったりした。4年生の時のA先生は授業が終わると机を後ろに片付けて教室の床に一面画用紙をひろげて夕方まで絵を描くことで遊んでくれた。1年生のときのM先生は5年ほど前に他界されたがいまでも住所のわかる先生とは年賀の挨拶を交換している。

これもつい4年ほど前の話。京都市交響楽団の組合分会の旗開きに参加したときのこと。チェロ奏者T・Eさんの名前にわずかな思い出があるような気がしていたので「もしかするとお母さんの名はS子さんですか」ときくと「そうですが、なぜ」ということに。じつは私の5年生のときのF・S先生が音楽家のT氏と結婚して大阪（当時は寝屋川）にすんでおられることは賀状の交換でわかっていた。大学受験で京都にこなければならぬということになって「それなら我家に泊まって京都に行けば」といわれ、3日間泊めてもらったのである。そのときに「これっ、Eくん」とお母さんが声をかけていたことが思い出の隅っこにあったのでT・Eさんとの会話になったしだい。彼のお兄さんもヴァイオリニストとして活躍しておられるとか。

中学校で勉強を意識

ところが中学校では一転、かなりきびしい高校進学を意識した勉強が待っていた。当時のO校長の面影は今でも記憶にあるが「町の中学校に負けない成績で高校進学を」という気概をもって先生方も教育にあたられた。だから期末テスト、模擬テストが実施され成績順が貼り出された。1年の3学期に最初

の模擬テストがあり先生が「山本が学年でトップだ」といわれみんなも、私自身もびっくりした。

当時私の家でも勉強机などはなかった。（兄弟5人分の机など買えるわけがない）中学校は授業終了後、希望者だけということで毎日「補修授業」を始めた。私は補修を受ける気がしなかったので家に帰るわけにも行かず、補修が終わってみんなが帰るまで広い教室や図書室で一人教科書や問題集を開いていた。そうすると特殊学級（当時はそう呼んでいた）のM先生が来て「校長も許可したので俺のクラスを使え」といつてくれた。特殊学級は机が5～6脚あるだけの小さな教室だったから一人で明かりをつけて勉強するには都合がよかった。今ふり返ればよくこんなことが許されたものだと思う。

私の家は漁師だったし海での生活にはあこがれもあったので当時宅間電波学校（香川県）進学を目指していたが、いつの間にか「大学にいこう」という気になって普通科の倉敷青陵高校志望に変えた。

しかし当時の我家は高校進学を断念し漁業を継いだ長兄、倉敷工業高校から横浜の会社に就職した次兄、3つ年下の弟、その2つ年下の妹がいて暮らしはとてきびしかったに違いなかった。（私はあまり気に留めなかったが）多分母と長兄が父を説得してくれたのだと思う。京大を無事卒業（6年間かかったが）して卒業証書を見せたときの母の顔は忘れることができない。

毎夜のランニング

中学校では毎年冬に「全校マラソン大会」が開かれた。学校を出発し鷲羽山を回って児島地区まで大回りして中学校に帰る10kmを超えるコースだった。私は思うところがあって1年のころから毎夜ランニングに出かけた。山道の道路は照明など無かったが暗い夜道を一人で黙々と走り続けた。やがて体調もよくなりランニングは病み付きとなった。倉敷青陵高校ではサッカー部にはいったが高校対抗駅伝では最長11km走者をつとめた。大学に入っても結婚しても、今でもこのランニングは続いている。現在のランニングコースは、出町 二条大橋 出町の鴨川河川敷の遊歩道コースで約4kmを人目につかない夜間に走っている。



現在の下津井中学校